

卓球選手に生じた上腕骨小頭・滑車間部に発生した 離断性骨軟骨炎の1例

○梶田 幸宏 (かじた ゆきひろ)(MD), 岩堀 裕介 (MD)

愛知医科大学医学部 整形外科

【はじめに】

上腕骨小頭・滑車間部に発生した肘関節離断性骨軟骨炎(肘 OCD)を1例経験したため報告する。

【症 例】

16歳男性。既往歴なし。小学4年生から卓球を始め、受診時は全国大会出場レベル、練習時間は4～5時間/日である。卓球の試合中にスマッシュを打った際に急に右肘の痛みが出現した。同日、当院救急外来を受診し、明らかな異常所見なしと言われ経過観察した。その後も卓球時の痛みが2週間持続したため当科を受診した。

当科受診時は明らかな変形、可動域制限を認めず、腫脹、圧痛も認めなかった。単純X線Tangential像、CT、MRIにて上腕骨小頭と滑車の間に発生した肘OCDと診断した。卓球時の痛みが持続していたため疼痛出現から2.5ヵ月後に手術療法を行った。関節鏡視下に観察すると、病変を上腕骨小頭・滑車間に5×10mm程度の病変を認め、損傷された軟骨は浮上していた。Soft spot portalから病変部を切除し鏡視下drillingを施行し、術後3か月で卓球に完全復帰ができた。

【考 察】

肘OCDは投球動作の加速期における外反ストレスにより上腕骨小頭部に発生することが多く、そのほか滑車部や橈骨頭での発生も散見される。しかし我々が渉猟しえた範囲では本症例と同部位での報告はなかった。本症例の肘OCDの発生部位は橈骨、尺骨との主な関節面ではないため物理的ストレスの加わりにくい部位である。卓球では肘関節屈曲位を保持したまま長時間頻回にストロークを行うため、投球時の外反ストレスとは違う発生機序が考えられた。